

出てくるって最初に言うといてや～
カマド半端ないって!!!

発掘新聞

3月29日号

平成30年度第4号

編集・発行

九州歴史資料館

電話 0942-75-9575



新開遺跡遠景

浮羽バイパス建設に先立つ発掘調査の成果!



平成30年度に当館が行った、久留米市田主丸町所在の新開遺跡

の調査が終了した。調査は国道210号浮羽バイパス建設に先立つて行われたものである。

新開遺跡では、古墳く奈良時代の

奈良時代の竪穴住居跡



代の生活面の下60cmから弥生時代中頃の生活面が見つかり、数百年の間、過去の人々によって利用された場所であるということが明らかとなった。

弥生時代中頃の生活の跡として、竪穴住居跡や溝、土坑が見つかった。中でも多く見つかった



竪穴住居跡で見つかったカマド

のが楕円形や方形の土坑であり、その中からは大きな土器の破片が出土するものもあった。出土した土器の多くが破片であることから、これらの土坑の中には、物を捨てるためのゴミ穴の機能を持つていたものもあったようだ。一方、古墳く奈良時代の生活面からは、多数の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、溝などが見つかった。竪穴住居跡の多くにはカマドが造り付けられていた。発見されたカマドの大半は土台の部分だけだが、これは住んでいた人々が住居を廃棄する際にカマドを壊すことが原因の一つと言われている。

浮羽バイパス建設に関係する調査は今後も継続予定であり、重要な成果が挙がることだろう。(梶佐古記者)

カマドのはなし

左上の写真中央部で「U」字状になっている部分がカマドの土台部分である。「U」の間に垂直に立つ石(支脚)があり、石の周囲がだいたい色に変色している。この変色は火を焚いた証拠である。遺跡の発掘ではこの焼けた土などを手掛かりにカマドを見つける。調査者の坂元雄紀技術主査によると、本遺跡の土の色を見分けるのは非常に難しく、涙目でカマドを探したという。

カマドの復元イメージ

※調査担当者の話を元に記者作成

